

[エッセイ]選者からのコメント

エッセイ 〈アートのことば、ケアのことば、わたしのことば〉 に寄せて

ササマ ユウコ(音楽家・芸術教育デザイン室CONNECT代表)

「極私は普遍に通じる」

2018年度東京大会(@女子美術大学)のランチテーブルで相席となった播磨靖夫さんから、不意に投げかけられた言葉です。障害のある息子さんの名を冠した浜松〈たけし文化センター〉の活動を例に、何よりもまず〈わたくしごと〉を出発点とした芸術や福祉活動の魅力について、播磨さんはまるで自分事のようにどこか嬉しそうに語られていました。〈わたし〉とは何か。その問いを極めた先には〈みんなのことば〉が待っている。アートとケアの実践には何より〈わたし〉が大切な軸となる。今でも播磨さんの笑顔とともに折に触れて思い出す言葉です。

〈小さな宇宙・マイクロコスモス〉と〈大きな宇宙・マクロコスモス〉をつなげて世界を捉え直す態度は、西洋／非西洋を問わず古来からの世界観とも重なります。〈わたし〉の中には宇宙があり、宇宙の中にも〈わたし〉がある。自らの内と外を往来するやわらかな思考は、特に〈アートとケア〉〈研究と実践〉の境界をまなざす態度にこそ求められます。一般的な〈学術のエッセイ〉は〈試論〉を指しますが、〈新しい知のかたち〉を目指すこの学会では学術から離れた〈わたしのことば〉も受けとめます。

その〈新しい知〉の出発点として、何より〈わたし〉をケアする場として、アートミーツケア学会ジャーナルに〈エッセイ〉部門が立ち上がりました。ここは文章だけでなく、音楽、写真、絵画などにも扉がひらかれている。もちろん手話動画も歓迎です。

〈わたしのことば〉はどこにある？

主観が許されない学術論文、専門用語が飛び交う現場、SNSの小さなつぶやきも、〈わたし〉が生む限りは全て〈わたしのことば〉であるはずですが。しかし何かがかぼれ落ちていく。〈エッセイ〉を書くということは、そのかぼれ落ちた〈わたし〉をすくい／掬い／救う行為かもしれません。

街にひらかれた「哲学カフェ」では、対話をはじめる前に「誰かのことばではなく、自分のことばで語ってください」「自分の考えが変わることを受け入れてください」と進行役から促されることがあります。〈自分のことばで語る〉とは〈わたしのことばで考える〉こと。それは、わたしの〈弱さ〉を受け入れる覚悟を持つことでもあるはずですが。

ここでは〈当事者研究〉という大きな目標は必要ありません。しかしこの学会の〈エッセイ〉は誰にも見せない日記や私小説とも違う。自分の内なる中心点を頭上の北極星とつなぐような意識で、〈わたしの世界〉をアートやケアの視座から語り直していくこと。小さな宇宙を見渡すなかで、かけがえのない〈わたくしごと〉を発見して光を当てる作業です。

どんなに些細なことでも構わないのです。それが自分にとって〈思考の種〉だと直感するならば、かならずそこには意味があります。何よりも頭と心をひらいて世界を捉え直すことは、日常の手ざわりを変えていく。いつも見ている風景さえ変わります。この経験を〈アート〉や〈ケア〉と呼ぶこともできる

でしょう。そこには、見えないもの、きこえない世界を立ち現わせる力が存在するからです。

エッセイには〈作品〉としての完成度や芸術性は求めません。しかしそれを求めたい〈わたし〉も否定しません。誰でもない〈自分のことば〉で考えて、伝えてほしいのです。人知れず育てられた〈思考の種〉にはきっと、かけがえのない〈わたしのことば〉が宿っているからです。

選評

〈極私〉の経験が普遍へとつながる透明度の高いエッセイだと思いました。過去の〈わたし〉が生き抜いた時間を静かにまなざしながら、とても見通しのよい世界にたどり着いている。真摯に考えぬかれた〈わたしのことば〉が持つ真の力を感じます。何よりもエッセイを紡ぐ行為そのものが〈セルフケア〉となっている。あらためて〈文学〉というアートの可能性にも気づくことができます。

研究やケアする立場にある人は、現場で一方向的な関係性を生みやすく、社会からも〈強いことば〉を求められがちです。しかし書き手はその危うさに最初から気づいている。なぜなら〈ケアされる人〉となった経験が、自他の世界を〈反転〉させる意識を生むからです。

〈わたし〉の弱さを受け入れて〈わたしのことば〉で語り直す。長い時間をかけて丁寧に掘り下げられた思考は、未来の活動や研究、何より書き手の〈いのち〉を力強く支えてくれることでしょう。そしてアートとケアが響き合う〈みんなのことば〉を生み出していくはずで